

もしかして俺って最強？ IN、ARC—
V!

征竜でファンデッカー狩りしたいから返して

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

許可は貰っていないぞ（笑）

ARCVはシンクロ次元編があれだったので途中できつた。

GXを汚されて激おこぷんぷんまる、これが俺の復讐だ！

あ、よくあるオリ主ものです。

目次

遙かなる遠い世界で

1

遥かなる遠い世界で

「いくぜ！俺はエクステエンジを発動！」

「エクステエンジ……？」

今日も楽しくフリー戦だ。相手は小学生である。

1人でパックをむきむきしてたので声を掛けたところ、了承を得ることができた。

客は俺らしいかいしないで大声を出しながらプレイする。店長が迷惑そうな顔をしてるが無視である。

大体、決闘者とはマナーが悪いのだ。

「知らないのか？簡単に言うとお互いの手札を交換するカードだぜえ。」

「へえ……初めてみるなあ。はい、これが僕の手札だよ！」

「どれどれ……」

どうやら彼のデッキは「ガーディアン」らしい。中々良いデッキだ。

それよりも俺は1つのカードに目を奪われた。幽鬼うさぎがいたのである。

幽鬼うさぎ、かなりのレアカードだ。手札誘発のカードでかなり優秀だ。ちなみに俺は2枚しか持っていない。

最近の小学生は金持ちだな……。ヴェーラーとうさぎで分かれるが、俺はうさぎのほうがいい。

クリフトツールにうさぎを打たれて、リアルファイトになり出禁になった決闘者がいるのは作者もドン引きした実話である。

「うさぎを貰うよ。」

「……事故ってるの？うさぎでいいの？なら僕は死者蘇生を貰うね。」

「はは、ハンデだよ。」

ちなみに手札はツインツイ×2、死者蘇生、同法の絆である。平常運転なので気にし

てはいない。

リストバンドにカードは仕込んであるのでシャイニングドロ（偽）はいつでも可能だ。

「よし……ここからは……あ！ちよつとごめんね。電話掛かってきたからちよつと出てくるね。」

「あ、うん。いいよ。」

デツキは置いて行くから見張っててねー。と言うと元気な返事が聞こえてきた。

ちなみに電話の件は嘘だ。そもそも決闘なんてちゃんとやる気はない。目当てのうさがぎが入ったので、もう彼に用はない。

デツキは置いてきたが問題ない。あれはプロキシ……ただのカラーコピーなのだ。いくらでも作れる。

このカードショップも他県から来てるので問題はないだろう。監視カメラもなかった。完全犯罪である。

「へへ……悪く思うなよ。」

「おい…」

さっさと逃げようとレンタルした自転車に乗り逃げようとしたところで原付にのつた男に声を掛けられた。

デカイ。これが第一印象だ。座っているのに俺よりデカく見える。身長は180cm以上はありそうだ。

「ああん？なんだお前は？」

「決闘しろよ。俺が勝ったら彼にうさぎを返せ。」

「チツ！見てる奴がいたのか！」

どうやら世の中はそううまくいかないらしい。ペダルに足を叩き付ける。

そして流れるような動きでスマホを操作し、決闘モードに変化させると愛用のデツキをセツトした。

今回はプロキシではない俺自身のデツキだ。少しばかり時代遅れかもしれないが環境デツキが相手でもワンキルはされないだろう。

「自転車でライディングデュエルだど!?ふぎけやがって!」

「原付も可笑しいけどな!だが俺に合わせてすぐ準備をしているとは見事だ:じゃあ
…ツツ!」

「決闘!」

こうして決闘が始まった。通勤ラッシュユダが熱き決闘者にはそんなことは関係ない。
信号を先に曲がったほうが先行だ。俺は自転車であつちは原付。早いのは常識的に
考えて向こうだが、俺のほうが早かった。

「馬鹿な!それは電動自転車ではない。ただのママチャリのはずだ!」

「タワケが!こちとら身長を伸ばすためにジャンピングスクワットを週3でやってんだ
ぞ!」

ちなみに現在162cm効果はまだ出ていない。

決闘は先行が有利である。ジャンケンが本番であとはオマケと言われているレベルだ。

「先行は頂く！俺のターン！ドロー！」

「！素人め、先行はドローできないぞ！」

「しまった！」

井家 面氏 LP8000↓LP4000

ペナルティによりライフが半分になる…まずい勢いに任せれば大丈夫だと思ったが気づかれてしまった。

これは痛い…しかも手札が事故っている。このままでは負ける！

「くそ！手札が気に入らないから、デッキに戻してシャッフル！そして改めてドローだ！」

「ふざけんな！そんなルールあるか！あと、ちやつかり6枚ドローしてるんじゃないやねえ！」

「今のマインドクラッシュにより、スピード・ワールド17にカウンターが1062個乗るぜ！」

「!?しまったそいつの効果は…」

思考をすぐに切り替える。所詮あの人格とは10分程度の付き合いだ。虐めなんてなかった。

それより問題はスピード・ワールド17（長いから7に省略）の効果だ。カウンターが12個以上乗るなんて滅多にないが、例外はいつだってあるもんだ。

「7をゲームから除外し、お前の手札をすべて墓地に送るぜ！」

「考えたな、ちくしょう！」

マインドクラッシュをくらったときにコッソリ2枚ドロしてたのだが墓地にすべて送られてしまった。

いま発動できるカードは一枚も落ちていない。俺のデッキがインフェルニティだったら次のターントップデーモンで何とかなったかもしれないが、インフェルニティは崩

してしまったのでそれはない。チェイン返してくださいあ。

「ターン…エンドだ…」

「サレンダーはしない…か。ならば遠慮なくいくぞ。ドロ―！」

相手の手札が6枚になる。反則はしないか…まあ当たり前だ。

だが勝負はまだわからない。相手が事故ったりする可能性もあるし、もし奴のデッキが壊獣などならこのターンは何もできないはずだ。まだ勝負はわからない。

「俺はゲール・グドラを召喚！攻撃表示！そのままLP3000払い、効果を発動！」

「ふっ…碌なカードを引けなかつたらしいな！」

ドン・サウザンド LP8000↓LP5000

「融合デッキ…つまりエクストラデッキからモンスターを墓地に送る！送ったのは虹光

の宣告者だ！」

「さらに墓地に送った虹光の宣告者の効果だ！儀式魔法か儀式モンスターを手札に加える！」

「儀式…読めたぞ！お前のデッキは【影憑依】だな！」

「そろそろ赤信号になりそうだから止まれよ。手札に加えるのは高等儀式術だ！」

赤信号にぶつかつたので止まる。それにしても奴が手札に加えたカードだが影憑依に入るのだろうか？

あまり詳しくないが影憑依はサーチ手段が豊富だ。わざわざライフ3000も払ってサーチする必要はあるのか…

わからない。影憑依が環境の頃はガチ決闘者たちをリアルファイトで闇討ちしてたのであまり対戦経験がない。

「さらにゲール・グドラの効果をもた発動！落とすのは二枚目の虹光の宣告者だ！」

ドン・サウザンドLP5000↓LP3000

「ターン1じゃないのか…それにしてもなぜそこまでゲール・グドラに拘るんだ？」

「すぐわかる…手札に加えるのはブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴンだ！」

「なん…だと…」

ブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴン…映画の奴じゃないか！

効果はしらないが欲しい。あとでくれないかな？映画は因みに見ていない。いったいどんな効果なのだ？

「高等儀式術を発動！効果は説明する必要はないな？レベル8の千年原人を墓地に送り…」

「ブルーアイズ・カオス・MAXマックス・ドラゴン！降臨せよ!!!」

「公道でやってんだからあまり大きな声出すなよ。」

常識がないやつだ。出てきたモンスターを見ながらそう思う。

しかしデカいなー全長25mくらいはありそうだ。無料のソリッドビジョンアプリでこれだから有料の奴だともっと大きいのだろう。

どれどれ効果は…え?…まじかよ…

「効果が読めない…!」

「ん?ああすまない。アプリのバージョンが古くてな。後で説明するぞ。」

「ちゃんと更新しとけよ…しかし攻撃力もわからないとなると怖いなー!」

「巨大化を装備するぞ。ライフがお前より少ないから攻撃力が元々の倍になる。」

「そのためのゲールグドラか…」

だからわざわざあんなサーチをしてたのか。

信号が青になったので進む。足が疲れてしまったのでスピードが落ちてしまったが、アイツは速度を落としてくれた。

後ろの車にクラクションを鳴らされてしまったので万能地雷グレイモヤを投げしておく。

直後に爆発音がしたが気のせいだろう。それにしてもコイツいい奴だな。後でL I
○EのID交換しようかな。

「んじゃ、バトルフェイズな。カオスマAXでダイレクトだ。」

「墓地に止めるカードはない。通すぜ。」

「おkあとコイツの今の攻撃力は……」

「8000だ！」

あ？

惚けてると、カオスマAXの口が開きしゅいんしゅいんと音が鳴り響いた。

コイツ…クズだ！ワンキルなんて人間のやることじゃねえ！

「ちつくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「ハハハハ！吹き飛ばべ！ちなみに敗者には罰ゲームとして遊戯王一の駄作にトリップしてもらうぞ!!」

「ふざけんじやねえええええええええええええええええええええええ!!」

「神様転生よりマシだろ！吹き飛ばべ！カオスビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイム!!」

こうして俺は後ろにあったセブ○イレ○ンを巻き込みながらARCVに飛ばされるのであった。